様　式　Ｆ－１９－２

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　　元 年　　６ 月 １２ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）
研究期間：2016～2018
課題番号：１５ＫＫ００７２

研究課題名（和文）フィリピン農村にみるスポーツと社会移動の動態―アスリートと出身家族の生活分析（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）Research on sport and social mobility through the case of Filipino boxers (Fostering Joint International Research)

研究代表者
石岡　丈昇（Ishioka, Tomonori）

北海道大学・教育学研究院・准教授

研究者番号：１０５１５４７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　9,600,000円
渡航期間：　12ヶ月

研究成果の概要（和文）：　本研究は、社会学の分野より、途上国の都市底辺層研究のパダライム転換を企てるものであった。具体的には、フィリピン・マニラの事例に基づきながら、従来の「貧困・社会的排除論」から「リスク社会論」へと転換を図り、そこから都市底辺層の比較社会学研究のための「枠組み」を構築することを目指した。「リスク社会論」研究の世界的拠点であるミュンヘン大学をはじめとしたドイツ語圏での国際共同研究を12ヶ月にわたっておこない、さらに学会、研究会、公開講義、大学の授業など様々な場面でも発表をおこなった。そのことで都市底辺層の比較社会学研究のための「枠組み」の一定の構築をおこなうことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ドイツの社会学者であるウルリヒ・ベックが述べたように、経済成長は「富の集積」と同時に「リスクの集積」を引き起こす。そして、富は上中流層に分配されるのに対し、リスクは下層に押しつけられる。このリスクの過剰な押しつけのひとつの現れが、マニラでは貧困地区の強制撤去であると言える。「リスク社会論」を援用することによって、グローバリゼーションの時代におけるグローバルサウスの都市底辺層世界の質的変容が視野に入ってきた。

研究成果の概要（英文）：This study attempted to elaborate a new analytical frame on the urban bottom in Global South from the field of sociology. Specifically, based on the case of Manila in the Philippines, I appropriated the concept of "risk society" to the study of the urban poor. Conducted international collaborative research in German-speaking countries in 12 months, I made presentations multiple times in conferences, special lectures at universities. As a result, I elaborated a tentative "framework" for comparative sociology research of the urban bottom in Global South.

研究分野：社会学

キーワード：リスク社会論　マニラ　都市底辺層

様　式　Ｆ－１９－２

## １．研究開始当初の背景

筆者は、これまで一貫してマニラの都市底辺層の若者の生活文化研究を進めてきた。本研究の基課題となっている科研・若手研究 B「フィリピン農村にみるスポーツと社会移動の動態―アスリートと出身家族の生活分析」もこの主題に沿った研究である。そこでは都市底辺層の若者の事例としてボクサーに着目し、貧困下を生きる彼らの生活戦略について、出身母村との関係にまで踏み込んで分析してきた。

しかしながら、基課題を進めていく中で、彼らの生活を根こぎにする新たな事態が登場した。それがマニラ各地の貧困地区の強制撤去である。現在、グローバル化の影響が著しいマニラでは、経済発展のための都市再開発が盛んである。その用地確保のために、都市底辺層は強制立ち退きというリスクを常に抱えながら日常を生きている。

この未曾有の事態を社会学的に捉えるために、本研究では「リスク社会論」を援用し、基課題を大幅に発展させた。ドイツの社会学者であるウルリヒ・ベックが述べたように、経済成長は「富の集積」と同時に「リスクの集積」を引き起こす。そして、富は上中流層に分配されるのに対し、リスクは下層に押しつけられる。このリスクの過剰な押しつけのひとつの現れが、マニラでは貧困地区の強制撤去であると言える。「リスク社会論」を援用することによって、グローバリゼーションの時代におけるマニラの都市底辺層世界の質的変容が視野に入ってくるのである。

グローバリゼーションに伴う都市底辺層の質的転換については、先進国の事例を中心にすでに豊富な蓄積がある。だが途上国都市の事例では、インテンシブな現地調査そのものがいまだ稀有である。そのため先進国をモデルに構築された理論をそのまま途上国都市に投影した研究が数多い。本研究は基課題を進める中で登場した現象に着目し、そこから単に事例補強をするのみではなく、新たな社会学的考察の「枠組み」―都市底辺層研究のリスク社会論的転回―を打ち出すものであった。それは、変容する途上国都市の文脈を正確に理解するために、マニラの事例と「リスク社会論」を独自に接合して理論形成を図るという世界的にも稀有な研究となることを目指した。

## ２．研究の目的

この「枠組み」の構築のために、「リスク社会論」研究の本場であるドイツ語圏で国際共同研究を実施した。実施に向けての準備は、次の三点に示されるように、十分な状況にあった。第一に、申請者は日本学術振興会国際事業部からの指名により、2014 年 11 月にドイツ・ブレーメンで実施された第 11 回日独先端科学シンポジウムに出席した。この 3 日間の国際会議の中で、ミュンヘン大学の von Unger 教授と「リスク社会論」の国際共同研究体制の必要性を話し合った。第二に、それを受けて 2015 年 5 月 16 日～6 月 1 日まで、ドイツのアレクサンダー・フンボルト財団の助成（CONNECT Follow-up Program）を受けて、申請者はミュンヘン大学で共同研究を実施した。また第三に、2015 年 9 月 20 日～30 日まで、日本学術振興会国際交流事業部の FoS Follow-up Program の助成を受けて、von Unger 教授が来日し、北海道大学で共同研究を実施した。以上のように本研究は、内容についても、また国際連携の面においても、十分な準備段階を経ており、滞りなく本格的研究に着手できる状況にあった。

本研究は、基課題を中心に収集したフィリピン調査のデータをもとに、von Unger 教授をはじめドイツ語圏における社会学研究を牽引する社会学者たちと「データセッション」（事例データの解釈を探究するセッション）を繰り返しおこなうことで、マニラの都市底辺層研究を「リスク社会論」の枠組みから刷新するものであった。それは「リスク社会論」をアジアの事例から補強し、より普遍化させる営為でもあった。

## ３．研究の方法

本研究は、基課題を中心にこれまで収集してきたフィールドデータを、最先端の方法的視点から解釈するための国際共同研究を意図するものであった。マニラの現地調査は、データセッションの内容を踏まえた「補足調査」のみとし、本研究の中心はあくまで理論的枠組みの探究とした。そして途上国都市の貧困把握の新たなパラダイムの創出を目指し、具体的には、次の二点について研究を実施した。

第一に、これまで申請者が実施してきたフィールドワーク（詳細は筆者の research map を検索されたい）で得られた膨大なデータ群を、リスク社会論の理論枠組みから再整理する。そのための国際討論および事例の再分析を集中的に実施した。

第二に、リスク社会論が西洋中心主義的な視座を備えていることを脱却するために、アジアの事例を踏まえた国際共同での「リスク社会論」研究の体制基盤を創り上げることを目指した。

## ４．研究成果

2000 年以降、経済のグローバリゼーションによって、マニラの中心地に多国籍企業が数多進出した。それに比例して、スクオッター地区の強制撤去が急増した（影響世帯数は 2002 年に 1043 世帯だったが 2011 年には 14744 世帯になった）。企業誘致を可能にする用地確保のために、

都市底辺層の住人が空間的追放を受けるようになったためである。その背景には、マニラの経済開発とジェントリフィケーションが存在する。貧困地区住民は、強制立ち退きというリスクの急増の中で、生活を営んでいる。

この未曾有の状況を捉えるために筆者がおこなったフィールドワークとそこでのデータを際分析したことから、次の点がより明瞭になった。今日、経済成長を続けるマニラは、富の集積と同時にリスクの集積を引き起こしている。そしてそのリスクが階層間で不均等に配分されている。都市底辺層は富の再分配から除外されながら、リスクの再分配が過剰なまでに課されており、そのひとつの現れが貧困地区の強制撤去であると言える。

ドイツの社会学者のウルリヒ・ベックは、後期近代社会に特徴的な事柄としてリスク概念を設定した（『危険社会』法政大学出版局、1998 年）。ベックは「産業社会」から「リスク社会」への転換を現代社会に読み取り、そこではリスクの生産と分配が常に問題となると論じた。ベックが先進国を中心事例として述べた分析内容が、今日、若干のかたちを変えつつ、途上国で現象している点が、具体的な事実からも浮かびあった。その成果は、以下の成果欄で示すように、国際学会において報告をおこない、さらに現在、英語論文を執筆中である。本研究は、これまで貧困や社会的排除という用語で記述してきた現象を、「リスクの集積と過剰分配」という観点から捉え返すことで、マニラの都市底辺層世界の構造転換を解明する視座を切り開いたものである。

## ５．主な発表論文等
（研究代表者は下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計４件）

① Tomonori Ishioka, 2018, From Squatter to Informal Settler: Moral Problematizaion in the Crisis of a Shantytown Demolition in Manila, Diversity, *Threat and Morality in Urban Spaces. An International Conference*, the University of Tuebingen,

② Tomonori Ishioka, 2018, Living with Insecurity: how poor young men enter the world of boxing in the Philippines, *Guest Lecture at the faculty of criminal justice and security*, the University of Maribor.

③ Tomonori Ishioka, 2017, Precarious Life: an Ethnographic Investigation of Nameless Filipino Boxers, *Vortrag, Institut für Ostasienwissenschaften*, Universität Wien.

④ Tomonori Ishioka, 2017, The Art of Listening: Illuminated at a Local Boxing Gym in Globalizing Metro Manila, *"Global South on the Move: Transforming Capitalism, Knowledge and Ecologies" organised by the Global South Stuidies Center*, the University of Cologne.

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等　なし

## ６．研究組織

**研究協力者**

**〔主たる渡航先の主たる海外共同研究者〕**
**研究協力者氏名：ヘラ・フォン・ウンガー**

**ローマ字氏名：**Hella von Unger

**所属研究機関名：ミュンヘン大学**

**部局名：社会学部**

**職名：教授**

**〔その他の研究協力者〕**
**研究協力者氏名：ウォルフラム・マンチェンライター**
**ローマ字氏名：**Wolfram Manzenreiter

**※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。**